

活力あるまちづくりに向けて

旧大洲市、旧長浜町、旧肱川町、旧河辺村が合併して誕生した大洲市。現代は、ご当地グルメやアイドル、そしてゆるキャラの登場が象徴するように、多くの自治体が観光事業に積極的に取り組んでいます。大洲市も例外ではなく、今力を入れているものの一つが観光事業です。

観光事業で大切なことは、地域の魅力を見だし外へと発信すること、また、それを観光客の増加につなげることです。しかし、それだけが全てではありません。人と人とのつながり、地域と地域のつながりが観光事業の基盤になっているということを、私たちは忘れてはいけません。



大洲の魅力ここにあり

私たちは育て、育てられることでさまざまなことを学び、あらゆる価値観を共有して生きています。その中で、地元の人たちによって長年育まれてきたことが伝統や文化、地場産業などを発展させ、大洲市の歴史を一つずつ形成してきました。

育まれてきた伝統文化 ～伊予の小京都～



大洲市は、山、川、海に囲まれた自然豊かな町です。これほど四季折々の風景に出合えるところは、全国から見てもそう多くはありません。その中で古くから築かれてきた伝統や文化は、時代が変わっても大切に受け継がれてきました。1市2町1村が合併した大洲市には、地域ごとに素晴らしい伝統文化が存在し、現在、私たちの誇るべき財産となっています。

日本100名城の一つに数えられ、2004年に木造天守が復元された「大洲城」。世界的にも非常に珍しい自然現象である「肱川



あらし」。浮世絵師・喜多川歌麿の復元された作品が飾られている「歌麿館」。坂本龍馬が時代を駆け抜けた「脱藩の道」。

2011年には、肱川随一の景勝地にたつむ臥龍山荘が、フランス・ミシュラン社の旅行ガイドブックである「ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン」で、一つ星に選定されました。また、大洲市歴史的風致維持向上計画が国からの認定を受けたり、今年の10月には、菅田地区の少彦名神社参籠殿が危機遺産リストに選定されるなど、大洲市が国内外で注目を集めています。

魅力を受け継ぐ人たち



市内では、至るところで古き良きものを残そうとする人々の活動にふれることができます。伝統工芸品を受け継いでいる人や文化遺産の継承に努める人、ボランティアで観光ガイドを行う人など、一人ひとりの取り組みにより、風情ある大洲市の魅力が守り育てられています。

地域には素晴らしいものがある
もっと多くの人に
地域に住んでいるみなさんに
まずは知ってもらいたい



長浜観光ボランティアガイドの会

会長 山本 慧子 さん

長浜町でボランティアガイドを務める「長浜観光ボランティアガイドの会」の山本慧子さん。現在、同会の会長として、長浜町に訪れる人を率先してもてなしています。自身が取り組んできたガイドの仕事について、山本さんはこう語ります。

訪れるようになりました。さまざまな人が訪れる中、私たちガイドに求められるものは、人前で話すことはもちろんですが、やはり、地域の歴史や文化などを細かく把握している知識力です。

私も本で調べたり、人に聞いたり、あらゆる手段を用いて勉強を行いました。そうすることで、以前にも増して地域を知り、好きになった気がします。普段何気なく見ていた風景が、他からすると珍しいものであったり、自分の知らない歴史に気づいたり、新たな地域の魅力に出会う機会が増えました。私たちは、自分の住む地域のことを意外と知りません。だからこそ、観光客だけではなく、そこに住むみなさんにも地域の歴史や魅力を伝えていくことが、ガイドにとって重要な仕事のひとつだと思っています。

地域の魅力を地域全体で共有する。それが、訪れた人たちに對する『おもてなし』への第一歩となるのではないのでしょうか」

戦略に変化をつける

人口減少社会に突入 〈今後の観光事業のあり方〉

晩婚化や女性の社会進出が一般的となった日本では、少子化などの影響により人口が減少している

大洲市でも年々人口が減少しています。現代は、この問題をはじめ他の自治体との地域間競争など、観光業界においては大変苦しい時代となっています。また、国際社会を迎え、海外から訪れる人も増えてきました。観光ガイドの育成や翻訳されたパンフレットの整備など、国際化への対応も求められています。

そのような状況下で、他と差別化を図り、うまく観光PRしていくためには、どのようなことを行っていく必要があるのでしょうか。

多様なニーズが求められる中、行政主導では細部までサービスをを行うことは困難です。そこで、行政と民間が協力し合い、一緒に

なって観光事業に取り組んでいく必要があります。

大洲市では平成14年に、官民一体型のまちづくり会社として、「おおず街なか再生館」が設立されました。現在、大洲市観光の柱である『うかい』をはじめ、市内のさまざまな観光事業に着手しています。民間ならではの視点を生かしながら、今日の大洲市観光事業を支えています。

さらに、今後は行政や民間だけではなく、市民のみなさんの協力も必要不可欠になってきます。市外から訪れる観光客とふれあう機会がもっとも多いのは、その地域に住んでいるみなさんです。地域全体で協力し、おもてなしの心で接すること。それは「またここに来たい」という、観光客のリピーター増加につながる大きな要素となるはずですよ。

観光客が求める利便性を いかに形にしていけるか

株式会社 おおず街なか再生館

代表取締役専務 河野 たつろう 達郎 さん



だれもが手軽にスマホ・タブレットなどのインターネットツールを活用するようになった今日、地域観光の周知方法は大きく変わってきています。従来のように、旅行会社が主となって行うのではなく、ネットワークから得たレベルの高い情報を基に、観光客個人が地域を選ぶようになりました。そのような情報社会の下、市内の魅力積極的に発信し、全国各地の中からいかに大洲市を選んでもらうかが最大の課題だと思います。

もちろん、情報発信はとても大事なことです。しかし、観光客を迎え入れる側として、私たち

が力を入れなければならないことは、求められる利便性に地域ぐるみで応えていく仕組みづくりです。これは、会社設立時から提唱していたことであり、最近になってその土台が形成されつつあると感じています。また、市内では活発的な若者が増えていて、おもてなしの心を育てる意識が芽生え始めています。

観光事業ではおもてなしの心が大前提です。だからこそ、行政や民間、市民が一体となって観光客の求めることにどこまで応えていけるかが、今後の重要な鍵となるのだと思います。

地域を結び

人とつながる

観光事業のPR戦略を状況に応じて変えることは大切です。同時に、時代の変化に関係なく、特別な「縁」で結ばれた地域間での交流を深めることも、両地域の未来にとって重要なものです。

交流を通じて 未来への活力を

大洲市では、全国各地の自治体と友好都市という関係を通じ、お互いの絆を深め合ってきました。

滋賀県高島市は、日本陽明学の祖として知られる中江藤樹の生まれ故郷であり、平成18年に大洲市と友好交流調印を交わしました。現在でも、「高島市を訪ねる旅」の事業を通して、交流を図っています。また、海外においても大韓民国全羅南道靈光郡を友好都市として、国際化にふさわしい文化的な交流を行っています。その他、鳥取県米子市や北海道えりも町とも友好な交流が続いています。大洲市では友好都市へ行き、視察研修や物品販売などを通して、現地

の人々とふれあう機会を設けています。また、その反対に、大洲市で開催されるイベントに合わせ、友好都市の関係者が市内を訪れることもあります。

これらの交流で大切なこと、それはお互いの地域を知ってもらう機会であるということです。事実、大洲市でのイベントで物品販売を行うと、大勢の人が押し寄せます。当然、伝統や文化、食生活など地域でそれぞれ異なります。それが、「こんなもの初めて見た」「○○○○でこんなところなんだろう」「実際に行ってみたい」というように、人の関心を引くことにつながるのだと思います。



11月1日～3日、北海道えりも町から、岩本溥叙町長を含む関係者（えりも町産業活性化委員会）10人が、友好交流事業として大洲市を訪れました。

この事業は、平成5年にえりも町から旧肱川町（現在の肱川町）にある風の博物館に、6畳風の「風神」が寄贈されたことがきっかけで始まりました。合併以降も、肱川ふれあいまつりでは、毎年えりも町の特産品を販売させてもらっています。

今回の訪問は、平成21年度に表敬訪問されて以来4年ぶりとなります。1日（金）には、大洲市役所を表敬訪問され、活発な意見交換が行われました。2日（土）には市内視察や観光、3日（日）の大洲まつりでは、さけ鍋の無料提供や特産品の抽選会を行い、大洲市民と積極的な交流を図りました。

現在もこうして交流が行われていることで、つながりは深いものとなります。そして、それは新たな可能性を生み出すきっかけになります。

地域の交流が人と人との交流につながる そこからさまざまな可能性が生まれる



北海道えりも町

岩本 ひろのぶ 溥叙 町長

本町の「風の館」と大洲市（旧
肱川町）の「風の博物館」は、数
多く存在する全国の地域の中か
ら、姉妹館提携という特別な縁で
結ばれています。合併後において
も、旧大洲市、旧長浜町、旧河辺
村のみなさんと新たなつながりが
できたことは大変ありがたいこと
です。

今回、交流事業が始まって20周
年を迎え、本町の観光や物産のP
R、絆をさらに深めることを目的
に大洲市へ訪れました。市内視察
の際には、交流の原点になった風
の博物館へ赴き、また、大洲城や
臥龍山荘なども訪れ、市内の町並
みと一体化した風情を存分に味わ
うことができました。大洲市のみ
なさんが本町に来られた際にも、
本町の観光名所などを巡っていた
いただきました。見るものは違いま
すが、同じような感動を味わって
いただけたのではないかと思います。
お互いの地域の特性を直接肌で
感じることで、それが交流事業を行
う上で大切になってくるのではな
いでしょうか。

今回の交流事業では、大洲まっ
りで、本町自慢のさげ鍋を大洲市
のみなさんへ配食し、「えりも町」
の特産品を周知することができま
した。何より、大洲市民のみなさ
んと心と心の交流を行えたこと
が、何事にも替え難いものとなっ
た気がしています。

本町と大洲市では、気候や習慣、
生産している食材などあらゆるも
のに違いがあります。しかし、そ
の違いが地域独自の伝統文化につ
ながっていて、町並みや特産品に
生かされています。本町には本町
の、大洲市には大洲市の良さがあ
り、それらを上手く活用すること
ができれば、観光や物産面でもさ
らなる可能性が生まれるはずで
す。

地域間での交流が人と人との出
会いを生み、つながりを深めてい
きます。それが将来、交流人口の増
加となり、地域活性化の礎になっ
てくれるものと信じています。
これからも、地域と地域の交流、
人と人との交流、そして心と心の
交流を大切に育んでいこうと思っ
ています。

— 共通する課題に向けて協力し合う地域づくりを —

観光事業にはもちろん、
魅力ある観光名所や特産品
など、地域性を象徴するも
のが必要です。しかし、現
代において、その要素だけを
武器にして渡り合っていくこ
とは困難です。

今、観光事業に求められ
ることは、それぞれの立場か
ら同じ方向に向けて協力し
合う体制づくりです。

例えば、民間が観光客の
利便性向上に向けてプラン
を作成する。行政は、その
プランの実現に向けて協力
する。市民のみなさんは、
地域の顔としておもてなし
をする。一見、するべきこと
は立場によって異なるよう
に思えますが、全ては結び
ついています。

観光事業とは、多くの「つ
ながり」によって形成される
ものです。私たちが「つなが
り」を大切に育んでいくこと。
それが、いずれ強固な絆と
なり、地域活性化への大き
な力となるのだと思います。